



## 【子どもの心を育てる、その5、子どものケンカ】

子ども同士のいざこざやケンカは日常的に見られるものです。子どもはケンカをしながら育つと言っても過言ではありません。そういった場面では、ともすれば、その子どもの「ケンカをしている」「言い争っている」「友だちを叩いた」「友だちを突き倒した」などの『行為』だけが『問題』として浮かび上がってしまいがちです。そして「どうしてこの子はこういう行動をするのか」「なぜ仲良くできないのか」と問い始めてしまいます。つまり、その子どもの性格や行動特性、あるいは「育ち」などに原因を求めてしまいます。こういった傾向は親だけではなく医師や保育士でも陥りやすい落とし穴の1つになっています。

### ＜「能力」という落とし穴＞

具体例で考えてみましょう。当院での育児相談の中でもしばしば遭遇する「自分の思うようにならないと怒り出して、友だちを責めたり手を出したりしてトラブルをしょっちゅう起こす」というケースを例にします。仮にSちゃんとしします。彼女は明朗快活で人なつっこく、幼稚園では先生や友だちにも積極的に話しかけることができ、年少の子どもたちにも優しく接することのできる女の子ですが、様々な相手とトラブルを起こします。Sちゃんは想像力も豊かで、ごっこ遊びが大好きですが、ストーリー展開や配役は自分で決めて遊びを進めてゆき、ときに進め方が強引で自分の思うとおりにならないと怒り出してケンカになります。こういった場合、どうしてもそのトラブルの場面に注目してその行動・言動を『問題行動』としてとらえて、その原因を「攻撃的な性格があるためではないか」「相手の気持ちを理解する能力がないのではないか」など、さまざまな推測をしてしまいがちです。『問題行動』と捉えることや、さらにその子どもの『問題行動』の原因は子ども自身の持つ「能力」や「スキル（技術、手練）」にあると考えることは、私たちの中に根強く存在しているようです（大人の場合、人付き合いが上手・下手とか社交性がある、というのはこの「能力」「スキル」というものが関与しています）。実際、Sちゃんが友だちとトラブルを繰り返すのは、Sちゃんの対人的な「能力」や「スキル」が欠如した未発達で未熟な状態だから、と幼稚園の先生から言われてお母さんは少なからずショックを受けてしまいました。そこでお母さんは、Sちゃんに何とかそれらを獲得させればより良い人間関係が築けるようになると考えて、育児相談に来られたのです。

Sちゃんの普段の幼稚園での生活全体についてお聞きすると、Sちゃんはいつも友だちとトラブルを起こしているのではないことがわかりました。自分で考えて作った折り紙の折り方を教えてあげたり、進んで幼稚園の先生や友だちに話しかけたり遊んだり誘ったりしているというのです。つまり、Sちゃんは場面や状況によって異なる姿を見せているのです。このことを単なる「能力」や「スキル」の問題としてとらえてよいでしょうか？

### ＜「能力」から「関係」へ＞

「能力」や「スキル」は、条件を統制した特定の状況下で測定されたり観察されたりして人の行為を数量化して客観的にとらえようとするものであり、ある個人の「能力」は周囲の環境に影響されることがあるけれど、本質的にはその個人の固定されたものと考えられます。しかしながら、実際の子どもの生活の中では、場面も状況も変化しますし、子どもはそれに柔軟に対応しながら生きています。ですから、そのまま当てはめて説明しようとするのは無理があります。さらに、ケンカやいざこざなどの人間関係の中で起こる問題は、相互のかかわりの中でお互いの持つ意見や主張がぶつかり合うことから生じるものですから、「関係性」という視点を抜きにしては考えることができません。

そういう意味では、子どもの行為を、子どもが生きる社会、世界、共同体や、そこに生きる人々との「関係

の網目」でみることを重視する意見が注目されます（佐伯胖：幼児教育へのいざない、2001）。この考え方は、子どもの行為の原因を、その子ども自身の中に求めることはせず、その子どもの置かれている「状況」に注目します。つまり、その子どもの立場に立って、親や保育者、友だちとの関係をみるのです。そうすることで、人や物とのかかわりの中で生きる子どもの姿に迫ることが可能になると考えるのです。

では、「能力」や「スキル」ではなく、「関係」に注目することで、何が見えてくるのでしょうか？

### ＜「関係」から見えてくる子どもの姿＞

もう一度、Sちゃんを例にしてみましょう。Sちゃんはその後、徐々に試行錯誤を繰り返して自分のやり方で友だちとの関係を構築してゆきました。その過程を、周囲との「関係」という視点でみてみましょう。

#### ① 関係の中でゆるされていたSちゃんの行動

先に述べたSちゃんの行動は半年近く続きましたが、冬休みのあとに変化が起きました。一緒にごっこ遊びをする友だちがいなくなりました。これまで一緒に遊んでいた友だちは、他の遊びを通して子どもたちとのかかわりが広がり、Sちゃんに頼らなくてもごっこ遊びを楽しむようになったのです。そうするとSちゃんのわがままや自分勝手な振る舞いを我慢してまで一緒に遊ぶ必要がないのです。遊んでくれる子どもがいなくなりSちゃんはやりたい遊びができない状況に追い込まれました。これまでケンカやいざこざを繰り返しても最終的には遊びが成立していたので、Sちゃんは自分自身の振る舞いを変える必要がなかったということです。視点を変えれば、ケンカが絶えないというのは、実は周りの友だちが、Sちゃんの独創的な遊びに魅力を感じていて、Sちゃんの自分勝手な行動をゆるしていたことが見えてきます。

#### ② すれ違いによる新たなトラブル

自分のしたい遊びができなくなってSちゃんは、園庭で友だちが遊んでいるのを少し離れたところから見ていくことが多くなりました。自分から興味のある遊びに入ろうとしたり、友だちが仲間に入るよう誘ってくれますが、なかなか一緒に遊ぶことができなくなりました。ここでお母さんは、また新たに心配になってきました。園長先生に相談すると「見守っていればいずれ自分で解決しますよ」とアドバイスをしてくださいました。

いつもケンカやいざこざを起こすときの相手であるT君は、Sちゃんの視線や表情から、Sちゃんが自分たちの遊びに興味を持っていることに気づいていたようです。ある日、鬼ごっこをしていたT君が、オニになったときにSちゃんに近づいて「つかまえた」と言ってSちゃんの腕をつかみました。Sちゃんは「いやや！」と言ってT君の手を振りほどいて、それから泣き出してしまったのです。急にSちゃんが泣き出したので、先生が「どうしたの？」と言って近寄ると、そばにいたT君が困った顔をして「ちがうんやで」とつぶやいたのです。T君は「一緒にやろうよ」のつもりだったのですが、Sちゃんには伝わりませんでした。もしT君のメッセージをSちゃんがうまく受け取っていれば、すんなりとSちゃんは鬼ごっこに加わられたかもしれません。

頻度だけ見れば、Sちゃんのトラブルは相変わらずでしたが、この頃からSちゃんは自分も一緒にやりたいという気持ちが相手に伝わらなかつたり、相手の意図を受け取り損ねることからトラブルになるということが多くありました。つまり、トラブルの内容が明らかに変化してきていました。園長先生はこの変化に気づいておられて、後日Sちゃんのお母さんにお話しされました。

#### ③ 遊びを通して「関係」が生まれる

すれ違いの状況がしばらく続いて悩んでいましたが、Sちゃんは道具を使う遊び（ドッチボールやなわとびなど）を自分から率先してやり始め、それに加わりたい友だちと一緒に遊ぶというオリジナルの方法を生み出しました。物を媒介にして、一緒に遊ぶきっかけを作り出したのです。この方法を用いて友だちと一緒に遊ぶことを実現したSちゃんは、遊びを通して、友だちと「楽しい」「面白い」といった「快」という情動を共有するという体験を積み重ねることができるようになりました。この頃には、Sちゃんは自分の考えを押し付けることが次第になくなり、例えばボール遊びをしたい時でも、友だちから「みんなが来るまで別のことをして遊んでいようよ」と言われても「うん、そうしよう」と言えるようになりました。

#### ④ 特定の友だちとのつながりへ

これまで友だちに対してのこだわりがなかったSちゃんが、特定の友だちと遊ぶようになりました。その相手は、遊びを通して「快」の情動を共有した相手です。そうすると、遊びの中で自分と相手の意見を調整しようとしたり、時にはゆずったりすることができるようになってきました。この特定の相手とのつながりが大切なものであることが読み取れます。

##### <関係論的視点で>

結果としてSちゃんの友だちとのトラブルは減り、仲良く友だちと遊べるようになりました。1年半近くかかりましたが、この変化は、人とのかかわりから積み重ねた体験によって、Sちゃんが自ら獲得したととらえることができます。さらに、Sちゃんの周囲の関係から見えてきたものもあります。つまり、Sちゃんの変化は、周囲の友だちや保育者との関係、遊びの傾向、クラスの中の間人間関係など、Sちゃんをとりまく周囲の関係の変化と切り離して考えることはできません。

トラブルを起こしていた当初のSちゃんは、表面上は友だちと遊んでいるように見えていても、気持ちは共有していませんでした。Sちゃんの都合のいいように遊びを組み立てていて、友だちは自分の考えたストーリーを実現するための道具のような存在でした。そのためSちゃんのいうことが気に入らなくて遊びを離れる友だちには全く気にしていなかったのです。でも友だちとの関係を構築する過程で、Sちゃんは遊んでいる相手との「快」の情動を共有する体験をします。それからSちゃんは友だちと一緒に遊ぶ楽しさを大切にするようになったのです。もし、「関係」を重視する視点がなければ、表面上の解釈だけに終始して、当初の遊び方と1年半後の遊び方では、そこに含まれている遊びの中で体験している内容や大切にしようとしているものには気づかないと思います。ずっと続いたトラブルの内容が時期によって変化したことも同様です。

問題と思われる行動をする子どもを見たときに、つい「何が原因でこの子はこういうことをするのだろうか」と考え、しかも子ども自身の中に原因を探してしまいがちです。しかし、子ども自身の中に原因を探しても、周囲との関係の中で生きる子どもの実態をとらえることはできません。育っていく子どもにかかわる保護者や保育者、教育者、医療機関関係者は、一人ひとりの子どものしていることの意味をより深く読み解く姿勢が求められます。子どもを理解しようとするとき、周囲との関係から子どもの姿をみようとする関係論的視点を持つことで、今を生きる子どもの姿に、より迫ることができるのではないのでしょうか。院長は育児相談の中でしばしば「子どもの行動・言動の背景には必ず意味がある」と説明しています。ここでいう「背景」というのは子どもを取り巻く環境や人間関係のことを指しているのです。

##### <自分の中で解決する力>

園長先生がSちゃんのお母さんに「見守っていればいずれ自分で解決しますよ」とおっしゃったのは、関係論的視点で見ておられたからです。「見守る」ということは、単純なようで実は大変なことです。表面的な問題だけを見ていると、つい「どうして仲良く遊べないの」「ケンカをしてはいけません」としか言えないのです。そのように言われた子どもには、仲良くしたいけどできない、ケンカはしたくないけどケンカになる、といったその子なりの理由があるので、言われてもピンときません。Sちゃんは「体験」の中から自分で解決できました。昔から「子どものケンカに親が出るな」というのは、このことを言っているのです。「あの子と遊んじゃダメ」「ケンカしないで、仲良くね」と命じられると、それに従う子どもは、「体験」することなく、表面上の遊びだけで終わってしまいます。つまり自分で解決する機会を失ったことになるのです。子どもには子どもの世界がありますが、大人は「かつて自分は子どもであった」ということを忘れてしまいます。「見守る」とはその子どもの持つ力を「信じること」でもあり、子どもは「信じられている」ことになります。

Woopy通信の「子どもの心を育てる」シリーズの中で「体験」することの重要性を述べてきました。子どもを信じることは「体験」につながるのです。

## 【予防接種の混乱】

この1年間で、予防接種が随分と変化しました。ただ変わるだけならいいのですが、これに関連して医療現場では相当な混乱をきたしています。

### <BCG>

BCGは、ツベルクリン反応陰性者で3か月以上4歳未満の乳幼児が対象でしたが、2005年からツベルクリン反応なしで6か月までに接種するよう、また6か月を超えると自費で接種しなければならない、と結核予防法を改正して変更になりました。生後3か月から3種混合(DPT)、ポリオ、BCGが接種できますが、ポリオとBCGは公的機関(保健所など)で実施ししかもいずれも生ワクチンですから接種間隔は4週間必要です。つまり6か月までに全ての乳児が接種を終えることは難しいのです。こういった声はかなり沢山上がりました。見方を変えれば、厚生労働省は現場のことを考えていなかったことになります。結局、6か月までではなく1歳までに、とすぐに変更されました。まさしく朝令暮改です。

### <日本脳炎ワクチン>

2005年5月に日本脳炎ワクチンの積極的な接種を控えるようにと厚労省から通達がありました。重篤な副作用(100万接種に1回くらい)を懸念してということです。これによってワクチン製造メーカーは、新しいワクチン開発を始め、同時に従来ワクチン製造は減らしました。ワクチンメーカーも企業ですから、当然「儲け」にならないことはしません。新ワクチンは、2006年春から夏に認可されて出荷する予定でしたが、2006年4月現在では、新ワクチンは局所の副反応が従来ワクチンより強く出る(接種部位が赤く腫れる)ことがわかり、国家検定を受けることができず、最初から作り直しになります。新ワクチンが出回るのは1年くらい遅れるようです。従来ワクチンは、現在入手は困難ですが、当院では、従来ワクチンを確保して再開することにしました。(3歳以上の接種対象者で、接種を希望される方は予約をしてください)

### <麻疹・風疹混合ワクチン(MR)と麻疹ワクチン・風疹ワクチン>

2006年4月からMRワクチンの定期接種が開始になりました。これに伴って、麻疹と風疹のそれぞれ単抗原ワクチンはそれまでの定期接種から任意接種になることが厚労省から各地方自治体へ通達されていました。これを受けて地方自治体ごとに対応を検討されましたが、2006年3月に京都市は、2006年度に限って従来通りの予防接種券を使って公費負担で接種できるが、任意接種として取扱うために保護者から同意書を求めるようにと、医療機関へ通達がありました。ところが、自治体によっては自費の接種に切り替わるところもあり、自治体での格差が懸念され、厚労省はやっぱり定期接種のままの取扱いにするという表明を3月末頃に出しました(4月中旬の時点で正式な通達はありませんが)。これも朝令暮改です。いずれにせよ、現時点では麻疹と風疹のワクチンが未接種でMRワクチンの対象でない子どもは、それぞれのワクチンを公費で受けられます。しかしながら、全国的に2月と3月に未接種の人の「駆け込み接種」が激増して、ワクチンが不足し始め、地方では3月上旬に欠品し、3月下旬には都市部でも風疹ワクチンの在庫が底をつきました。2006年4月現在全国的に在庫はゼロです(7月頃に再び出回る予定)。これも、MRワクチンが始まることと、単抗原ワクチンが定期接種からはずれることから、ワクチン製造メーカーが生産を減少したことも影響しています。

医療現場に従事する者にとって、このところの厚労省の様々な施策には「?疑問符?」がつくことが多いように思います。本当に国民の健康を願っているのか、あるいは自分たちの保身を考えているのか(何かまづいことがあったら、自分たちが責任を取られないように考えているのでは、と勘ぐりたくなる)、よくわかりません。今の子どもたちが体も心も健やかに育っていくために、教育・医療・福祉など、単にお役所や政治家だけに任せるのではなく、国民は受身でいるだけではなく、もう一步踏み込んだ姿勢が必要とされているのかもしれません。